

「敵」の実体化過程- ドドスにおけるレイディング と他者表象(遊牧民特集)

著者	河合 香吏
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2002-09
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008279

「敵」の実体化過程

ドドスにおけるレイディングと他者表象

河 合 香 吏

はじめに

ドドスはウガンダ北東部カラモジャ地方に住むウシ牧畜民である。ドドスの居住域はケニア、スーダンとの三国国境地域にあり、1999年に調査を開始して以来、南に隣接する国内のジェエ、および国境をはさんで東に隣接するトゥルカナとのあいだには、季節を問わず相互に家畜の略奪を狙った襲撃（レイディング）がくり返されてきた。ドドスは言語学的には東ナイロート語群テソートゥルカナ（Teso-Turkana）系に属し、同言語系統のジェエおよびマセニコとは国内で、そして、スーダンのトポサ、ジイイエ、ケニアのトゥルカナとは国境をまたいで隣接している。人びとの記憶にある限り、ドドスはこれらの隣接するすべての集団と襲撃の応酬をしてきたのである。

本報告では、ドドスにおけるレイディングの実態を概観するとともに、この地域における牧畜民同士の集団間関係を考えてゆく材料として、レイディングをめぐる多彩な実践に着目する。さらに、レイディングにかかわるウガンダ政府の動きと、これに対する人びとの反応にもふれたい。

1 レイディングの実態

東アフリカの牧畜社会におけるレイディングは古くからよく知られ、この地域の民族誌にもしばしば記述されてきた。それは「好戦的な牧畜民」のイメージを作りあげてきたものでもあるが、最近では、冷戦後に AK47 型自動小銃などの武器が大量に流入したことや、政府軍の介入などとも関連して、その武装化・過激化が指摘されている。

まず、被害の実態についてみておきたい。表 1 には、2001 年 3 月から同年 12 月までの 8 カ月間にドドスで起きたレイディングをまとめた。レイディングには、放牧中の群れを水場や放牧地で待ち伏せして攻撃する方法のほか、夜間に家畜囲いを狙うものもある。後者には、武装集団を組織して家畜キャンプや集落を襲撃する以外に、囲いの柵を一本一本はずしてウシを連れ出し、見つからなければそのまま連れ去る（見つければ銃撃戦だが）といった「家畜泥棒」と呼んだほうがよいような方法もふくまれる。規模も、数人で一群を狙うものから、数百人におよぶ（とされる）武装集団によって数千もの家畜が一度に略奪されるものまでさ

表1 ドドスランドにおけるレイディング被害 (2001年3～12月)

発生月日	襲撃集団	襲撃現場	被害家畜数	死傷者 / 備考
2001年				
3月	トゥルカナ	集落	1群 (回収)	(平和協定中) 敵2人死亡
	トゥルカナ	放牧中	2群 (回収)	
	トゥルカナ	集落	1群	
	トゥルカナ	集落	1群	
4月	トゥルカナ・ジェ・マセニコ	放牧中	4群 (うち3群回収)	ドドス3人負傷 ドドス1人死亡
6月	ジェ	放牧中	3群	
	トゥルカナ	集落	1群 /26頭	敵1人死亡 (平和協定中)
	トゥルカナ・ジェ・マセニコ	放牧中	4群	
7月	ジェ	集落	7頭	
8月	未確認 (トゥルカナ／ジェ／マセニコ?)	キャンプ	1群 /33頭	
	トゥルカナ・ジェ・マセニコ	キャンプ	2群	ドドス1人死亡
8～9月	ジェ	放牧中	4群 /400頭 (一部回収)	
11月2日	ジェ (?)	給水中	1群	
6日	ジェ	放牧中	1群	
16日	ジェ	集落	1群 /50頭	敵1人死亡 ドドス1人負傷
18日	ジェ	放牧中	3群 (回収)	
26日	トゥルカナ	集落	1群 (回収)	
30日	ジェ	集落	1群	
12月9日	トゥルカナ	集落	1群 (回収)	
17日	ジェ	放牧中	3群	
?日	ジェ	放牧中	3群	

(注) 2001年11～12月は現地調査中の情報, それ以前は聞き取りによる。

(出所) 筆者作成。

まざまである。

表1のうち、レイディングの発生日が明記されているのはフィールドに滞在中の2001年11～12月のデータであるが、これらはすべて住みこみ先の集落にもたらされたニュースにもとづいている。ドドス側が攻撃を受けた場合には、迅速に、着実に、詳細な情報はいってくるのである。逆に、レイディングに行った、ウシをとってきたという話はなかなか聞かれない。けれども、ドドスがレイディングを仕掛けていないはずはないのである。表2を参照していただきたい。住みこみ先の集落の家長の牛群について、その出自を示したものである。全体のじつに34%以上がレイディングによって得た家畜に由来している。ここにレイディングの事実をみないわけにはゆくまい。

表2 牛群の出自別構成 (2000年2月)

入手方法	個体数	割合 (%)
婚資	83 (65)	48.5
交換・代償	16 (9)	9.4
購入(銃と交換等を含む)	13 (11)	7.6
レイディング	59 (38)	34.5
計	171 (123)	100.0

(注) (1) 婚資, 交換・代償で入手した個体のなかには, その個体自体の出自がレイディングである (ことがわかっている) ものを含む。

(2) かっこ内は集落で生まれた個体数。

(出所) 筆者作成。

2 レイディングをめぐる実践

レイディングは言説として語られるだけでなく、日常生活のあちらこちらにその影をみてとれる。ドドスは高い垣根にぎっしりと囲われた堅牢な集落を築き、夜には青年たちが家畜囲いの脇で銃を

かかえて眠る。放牧に際しては牧童がつねに銃をたずさえ、採食場所や水場を頻繁にかえて待ち伏せをかわすとともに、家畜群の到着前に水場付近をパトロールするなど警戒を怠らない。

さて、1999年11月からの調査はわずか2カ月半の短い滞在だったが、翌年2月にフィールドを離れるまでのあいだ、レイディングは（私にとって）日に日に「現実的」なものとなっていく。12月にはいると、ドドスランドの各地からウシ泥棒や襲撃のニュースが頻繁にはいつてきた。レイディングはこの時期、すでに仮想的ないし潜在的な脅威ではなくなっていた。国境地域に住むイク（狩猟やハチミツ採集などを主生業とする家畜をもたない人びと）からは、「トゥルカナが（ウガンダ・ケニア国境をなす）断崖地帯をのぼってきた」とか「給水をどこそこの沢でしていた」などの目撃情報がつぎつぎともたらされた。足跡などの痕跡にも人びとは敏感になり、そうした情報もまた頻繁に行き交うようになった。銃弾を求めてスーダン国境の町に出かけるなど、襲撃に備えた動きも活発になっていった。同時に、集落の内外で私が目にしたのは、さまざまな儀礼的实践であった。

集落には、周囲にアカシアの樹皮で作られたロープを回したり、ウシ囲いの門に特別な樹の実をぶらさげるなど、防衛を意図した呪物が目立つようになった。外を歩けば、呪物や儀礼の痕跡には事欠かなかった。小径が横切るちいさな沢には、二つに切りわけられたソーセージ・トゥリーの実とアロエと禾本科の植物が放置されていた。ここで敵の撃退儀礼がおこなわれたのだ。あるいは、ブッシュの小径にアカシアの樹皮で作ったロープが渡してある。中央部には結び目がある。これも敵の撃退を意図して預言者（*emuron*）からの指示によって施されたものであった。ある朝、いつものようにウシ囲いに行くと家長の第一夫人が土器

の壺をもって囲いの中をぐるぐると回っていた。夢見のお祓いだった。ウシ囲いが空になっている夢をみたのだという。壺はさいごに囲いの門におかれた。

ドドスの家畜は集落と家畜キャンプとに分散して飼育され、これらはいずれも頻繁な移動をくり返している。12月24日に設営された共同家畜キャンプは、囲いの数がゆうに100をこえる大きなキャンプであった。設営当初から周囲の草がじゅうぶんではないことが指摘されていたが、移動を決めたのは、キャンプのリーダーであり、かつ預言者でもある男の言葉だった。2000年1月12日、彼は「今晚をここで（無事に）過ごすことはできないだろう」と、敵の襲撃を預言した。多くの家畜群がこの夜のうちにキャンプ地を離れ、事実上、キャンプは解体した。

翌日、このおなじ預言者からトゥルカナの撃退を目的とした儀礼の指示が出された。その日のうちに長老たちは集会を開いて犠牲獣の体色や儀礼の開催場所を確認した。儀礼は翌々日、1月14日の午後にケニア国境に近い稜線上の山道でおこなわれた。供犠にされた黒い去勢ウシの頭部は道のまんなかに埋められた。皮からは長いテープが一本作られ、参加者に数十センチずつわけあたえられた。人びとは帰りの道すがら、牛群の踏みあとが東側から山道に連結している場所をみつけるたびに、地面に穴を掘り、短く切ったテープを輪にして埋めていった。これらはいずれもトゥルカナ撃退の呪力を発揮する。これにより、トゥルカナはここを横切ることができない。この地点に到達すると、急に恐ろしくなって引きかえしたり、仲たがいをはじめたりするのだという。

この儀礼のおこなわれたまさにその日の深夜のこと、夜中の12時過ぎに銃声で目を覚ました。住みこんでいた集落の三軒隣（歩いて5分ほど）の集

表3 レイディング被害 (1999年12月～2000年2月)

発生年月日	襲撃集団	襲撃現場	被害家畜(群)数	死傷者/備考
1999年11月	ジェ	キャンプ	5群/100頭以上	死者多数
12月11日	ジェ	放牧中	1群(回収)	
12月19日	トゥルカナ	集落	1群/22頭	ウシ泥棒
2000年1月5日	トゥルカナ	集落	1群/62頭	ウシ泥棒
14日	トゥルカナ	集落	1群(回収)	ウシ泥棒
20日	ジェ	キャンプ	5群	深夜の襲撃(5時間の銃撃戦) ／ドドス5人、敵5人死亡
23日	トゥルカナ	キャンプ	10群以上	死傷者多数
31日	トゥルカナ	キャンプ	13群/1000頭以上	未明の襲撃(11時間の銃撃戦) ／ドドス14人、敵1人死亡
2月18日	ジェ	キャンプ	9群	敵2人死亡

(出所) 筆者作成。

落が襲われ、男性たちは銃を手にとびだしていった。さいわいにも発見・追跡がはやかったためにウシは回収され、敵は逃散、ドドス側にも負傷者はなかった。人びとは儀礼の効果を確認したかもしれない。侵入者はトゥルカナと断定され、これを疑うものはなかった。

各集落では囲いを補強したり、囲いのさらに外側にもうひとつ柵を築く二重フェンスが流行した。偵察やパトロールが強化され、ふだんは集落にいることの多い壮年の男性たちも銃をもって放牧に従事するようになった。数日後にはふたたび預言者から指示が届き、1月30日の夕刻には、住みこみ先の集落のすぐ脇の沢においてこの地域あげての集団儀礼がおこなわれた。

ドドスはふだんから家畜の腸をもちいた占いをおこなうが、ここでもさかんに「敵の動き」が読み解かれていた。ドドスランドの北東部に位置する丘陵地は、乾季がすすんだこの時期の貴重な牧草地であったが、2月1日の夕刻におこなわれた腸占いには「東はよくない」との啓示がでた。これを受けて各集落では急遽、日帰り放牧のルートが変更された。住みこみ先の家長はこの日の夕刻、すべての家畜と牧童に対して「身(命)を守る」ための「泥」(emunyaen)を塗りたくった。私も同様

に泥だらけにされたのだが、にもかかわらず、私はこの日以降、放牧についてゆくことを禁じられた。翌2月3日には、ふたたびケニア国境に近い丘陵地でヤギをほふっての儀礼がおこなわれた。道が東と南に分岐している地点において、東からのトゥルカナの侵入をブロックするように、両方の道をまたぐかたちで儀礼の場が作られた。ここでもまた腸占いがおこなわれて新たな啓示が出る。エンドレスである。

この期間にドドスの受けたレイディングを表3にまとめた。

たび重なるウシ泥棒に人びとはいらついていた。「われわれは怒っている」といった発言は日々耳にされ、次第に過激化の様相を呈していた襲撃はついに多数の死者をだすにいたる。ドドスランドの北東部に設営されていた家畜キャンプでたてつけに二度の大規模なレイディングがあり、激しい銃撃戦の末におのおの10群、1000頭以上のウシが略奪されたのである。

このニュースが伝えられた4日後の2月5日、前日から姿を消していた集落の若者ふたりがロバ7頭とウシ1頭を連れてもどった。国境付近の沢にいたトゥルカナの家畜をとってきたのだという。さらに4日後の2月9日には、5人の青年がトゥ

ルカナの家畜キャンプからウシ17頭を「ウシ泥棒」方式でとってきた。翌2月10日、集落の若い男性たちは「二晩帰らない」といってふたたび姿を消した。結果的には失敗におわったのだが、彼らは大がかりな武装隊を組織し、国境の断崖地帯を越えてウガンダ領内にキャンプを作っていたトゥルカナの家畜を狙ってレイディングに出かけていた。水場で待ち伏せしたが、トゥルカナはすでに移動したり、放牧のコースをかえていたことが、牛群の足跡や糞などの痕跡でわかったという。

私は2月半ばにフィールドを発った。帰国後に届いた手紙には、近所の集落において多くの死傷者をだしたレイディングの詳細が書かれていた。そして、つぎにフィールドを訪れた翌2001年11月までのあいだに、住みこみ先の集落では二度のレイディングによって家長の牛群のほとんどすべてが失われた。

各地でレイディングによる被害が起きたこと、そしておそらくそれ以上に、レイディングを伝える情報そのものが、強い警戒をうながし、じゅうぶんに敵意を醸成することとなった。人びとにとって襲撃は現実的な脅威となり、痕跡や言語情報に強く依拠しつつ、「敵」はやがてトゥルカナに特定されていった。実質的な防衛策にくわえて、さまざまな儀礼的实践、あるいは預言者の言葉それ自体もまた、この過程に大きく寄与していたといえよう。こうして、可能態としてつねに潜在的な脅威として在った「敵」は、現実態としての「敵」としてたちあらわれるにいたる。

この地域における集団間関係は、複数の隣接集団間における敵対と同盟の関係が錯綜するなか、きわめて状況依存的なものとなっている。集団は恒久的な「敵」と「味方」に分類されうるものではないし、ある集団にとって、特定の集団との関係が永続的で固定的であることはまったくない。

たとえば、放牧地や水場などの土地利用においても、ドドスとトゥルカナとのあいだには、友好時の共同利用、敵対時における緩衝地の形成、他集団の侵入を「許容」(黙認)する、あるいは、姻族や友人などの個人的な関係を頼って家畜を預けたり寄宿するなどして他集団の土地で放牧活動をおこなうといったように、国境を越えたかたちで、多彩な利用の形態がみとめられる。そもそも他者との関係自体が非固定的で文脈依存的なものであるといったほうがよく、トゥルカナとドドスが敵対関係にあるときにも、ひとりのドドスにとってトゥルカナのすべてが「敵」であるとはいえない。彼にはトゥルカナの友人もいれば、通婚関係を介した姻族もいるのである。

ドドスにとって、トゥルカナはつねに「敵」であるわけではない。揺るぎなき「敵」としての他者ないし他集団というものがもともとあったと考えるはならないし、脅威の対象や襲撃の相手は、あらかじめわかりきった誰か、ではない。前もって準備された配役やシナリオをもたない他者表象の過程こそが、集団間関係を生みだし形づくりにつづけるのである。本節にみてきたことは、「トゥルカナは敵である」という命題——その内実とは、すなわち、具体的な相手を想定し前提とした多彩な実践をつうじて、特定の他者が「敵」として実体化されてゆく過程そのものであった、ということにつきる。敵意が蓄積され、増幅された憎悪が集団としての他者に固定的に結びつけられてゆくことの招きうる悲劇を、われわれは多くの民族紛争のなかにみる。その機序の一端が、ここにあると思うのである。

3 2002年、「刀狩り」のゆくえ

多数の死傷者を出し、過激化にひた走るレイデ

イング合戦。カラモジャの南部地域ではとりわけ大規模な襲撃がくり返され、この地域の擾乱はすこぶる狼藉なる牧畜民の蛮行にあると報道された。手を焼いたウガンダ政府は、一時は空爆にもおよび武力鎮圧の試みをへたのち、ここ2年ほどのあいだは武装解除に力を注いできた。ドドスの住むカラモジャの北部地域においても、非合法に所持されている銃の回収をめざし、2002年1月2日を最終期限として自主的供出を求め、それ以降は国家権力に訴えて無条件に銃を召し上げる「刀狩り」を強行しつつある。いっぽうで、若者に対して（所持している銃をもって）LDU（Local Defense Unit）に入隊することを要請し、さらに国境地域には軍隊を派遣してトゥルカナの侵入に対する防衛にあたらせるなど、セキュリティの回復に本格的にのりだしている。

だが、政府の思惑が容易に遂行されようとは思われない。これまでもカラモジャの武装解除は何度も挫折をくり返している。ドドスにおける実質的な実施の試みは今回が初めてであるが、人びとは軍隊の防衛体制が画一的で表層的であることを指摘し、疑念を隠さない。「軍隊はわれわれの土地を知らない」、「ウシの（通る）道を知らない」、そして「ウシを敵から守ってくれるというのなら、すべての放牧地、すべての水場に兵士を配置し、夜にはすべての集落に兵士を滞在させるべきだ」とし、定時のパトロールなどにはなんの意味もないことを揶揄する。実際に、軍隊の駐屯するバラックのすぐ脇を通して家畜が連れ去られているのである。近代的な戦争・戦闘技術によって「ウシを守る」ことがはたして可能かどうかははなはだ疑問なのであり、堅牢な集落を築き、放牧コースを頻繁にかえ、そして、自ら銃を携えて放牧に出かけ、夜は家畜囲いの脇で銃を抱えて眠る——そうした手段をウシを守る方法としてきた人びとは、

LDUへの入隊には積極的な姿勢をみせず、同時に銃の供出を拒むのである。

LDUに対する不信は、ひとつには、越境を領域侵犯として阻止しようとする国家の論理と、唯一の財産であるウシの略奪のみ警戒するドドスの論理が、根本的に異なっていることにあるのではないか。国家は国境線の内側に位置する土地を自国領として防衛しようとする。だが、「土地」はそこに生きる人びとにとって、民族の歴史とポリティックスの現場でもあり、そうしたなかに営まれる生活の場である。おそらく、「テリトリー」といった概念はこれらの社会にそぐわない。トゥルカナが家畜を連れてドドスの生活・活動圏内の土地を利用しているとき、人びとは「トゥルカナがウガンダにきている」という。つまり、両者の境界を示すためには、ウガンダという近代国家における「国境」の概念を使うほかないのである。「ドドスの土地」という言葉はある。だが、それは明確な境界線をもつスティックで排他的なテリトリーといったものではまったくない。人びとがトゥルカナの動きに敏感なのは、レイディングによってウシが奪われることを警戒するからであり、自らの生活・活動する土地が侵略されるような事態が想定されているわけではない。

この地域の集団間の関係は、おのおのの社会がおかれた現代的な状況をふまえつつ、土地・自然資源をめぐる利用や領有のありかたや、民族集団の歴史、そして国家政策との関係をもふくめた「生」の現場から再考察してゆく必要がある。それは、さまざまな文脈において生起する人びとの具体的な実践から、その生活世界ないし「生」の全体を包括的にとらえかえしてゆく作業にほかならない。

（かわい・かおり／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）